

令和元年度第3回自立支援協議会相談支援部会 議事要旨

1. 開催日時 令和元年11月11日(火)午後1時30分～3時30分(非公開開催)

2. 開催場所 市役所4階S2・S3会議室

3. 出席者(委員)*団体名のみ記載

リーダー:(福)パーソナル・アシスタンスとも

サブリーダー:(福)サンワーク

委員:いちょうの会、浦安市視覚障害者の会トパーズクラブ、浦安市身体障害者福祉会、浦安手をつなぐ親の会、(福)敬心福祉会、(特非)千楽、(特非)発達わんぱく会、(特非)かぷあ、(同)カーサ・デ・ビアンカリリー、(福)佑啓会、介護給付費等の支給に関する審査会、新浦安駅前地域包括支援センター、中核地域生活支援センターがじゅまる、猫実地域包括支援センター、こども発達センター、社会福祉課(事務局)障がい事業課、障がい福祉課

4. 議事次第

1. 開会

2. 議題

(1) 第2・3回自立支援協議会の協議内容と報告

(2) 第2回相談支援部会・作業部会の振り返り

(3) 事例検証

3. 閉会

4. 配布資料

議題(1)資料1-1 第3回浦安市自立支援協議会 報告

参考資料 自立支援協議会 昨年度との変更点

参考資料 議論の可視化についての工夫

議題(2)資料 第2回相談支援部会・作業部会の振り返り

5. 議事概要

1. 第2回・第3回自立支援協議会の報告

第2回、第3回自立支援協議会の内容を報告した。

2. 第2回相談支援部会作業部会の振り返り

第2回相談支援部会で検証した事例の振り返りを行い、これまでに検証した結果をまとめた事例集案の構成及びそこから見える課題について、協議を行った。

■主な意見（リーダー：リ、サブリーダー：サ、委員：委、事務局：事）

- リ：個人的には旗振り役を決めたほうがいいと思うが、決めると縦割りや機動性が低くなり、逆に抱え込みになってしまい良くない等の意見もある。
- 委：薬剤師から気になる事例の相談があった。薬を取りに来た高齢者の方の状態が以前に比べて衰えており、介護者の顔も最近見ていないので心配とのこと。
この方の主たる介護者である娘が精神的な医療が必要そうだったので、内部で調整したことがあった。支援できる内容であればこちらで支援するが、もう少し早めに他機関につなげていったほうがよかったかもしれない。
- 委：こどもの計画作成で関わる際に、ネグレクトの疑いがあり、通報するか悩んだケースがあった。実際に起きる前のことに難しさを感じたことはあった。
- リ：つなげようと思っても心理的な壁があったということか。
- 委：関係機関が多いと、伝えるタイミングについて迷うことがある。一緒に動いている支援者がいる場合に「この機関に伝えるといい」と背中を押してくれると心強い。
3世代の複合ケースなど関係機関が多い場合はメーリングリストを活用すると、状況を知った各分野の人が動いてくれる。この場合、発信者が旗振り役になっているが、支援の方向性は会議でその都度決めていくことになる。
- リ：最初に困難性を共有して、多角的な意見交換ができれば連携も進むが、全体像が見えない中で、一人で判断しているような感覚だと他機関と連携していく決断が鈍るということか。
- 委：旗振り役となる支援機関に最終的にはつなぎたいが、難しい場合はチームで協力して解決していくような感じだ。あとは横のつながりの支援が大事なので、一人ではなくみんなで責任感をもって支援していくことを後押ししている。
- 委：色々な機関につなげなければならない場合、横のつながりを援助する機関が絶対に必要だ。そこはがじゅまるか基幹相談支援センターが妥当だと思う。そのあとは、旗振り役が声をかけなくても、各機関が情報を共有しながら一緒に考え動いていくことは必要だと思う。旗振り役の役割は初期と、その後では違うのだろうと思う。協議会で出た意見は、ある意味後半の部分ではないか。
- 委：気にはしているが誰も手を出さずに問題になるケースもよくあると思う。誰かが定期的に見守っていくとか、関係機関のネットワークで共有し確認しあえる仕組みになるといいと思った。
- リ：事例集をみながら思ったのは、気になる世帯の情報が入った場合に、すぐに方向性を出すことが難しいのではないかとということ。意見があったように他機関につなげていいか自信がなく抱えている事例。横のつながりを早めに作ったほうがいいとは思いますが、中々一歩が出ない事例もあると思う。そういう情報が自然に集まる仕組みはなく、問題が起こってからチームが呼ばれることが多いので、そうではない動きができればと思う。

委：他市では地域で活動する保健師に関わってもらえる事例があるようだが、浦安市の場合どうなのか。

委：市の保健師では、皆さんのようなケースワーク的な情報は不足しているところが多いと思う。情報共有の場があったほうが良いという話だが、関係機関が増えるたびに、その都度場をつくるのか、自分たちの機関も関係性を築けていないのにつなげるのか、人数が増えた場合に日程調整が難しい等が課題だと思っている。

それから、高齢者虐待対応では、毎週決まった時間を空けており、受付したケースの検討会議はこの時間に行っている。月に1回、情報共有する日を決めておけば、その月にあった継続ケース、新規ケースの取扱いをしながら蓄積していくのも一つの方法である。

サ：毎月決まった日に集まり、関係する機関がその都度集まるのはありだと思う。

委：要保護児童対策協議会では、関係機関が集まり、毎月50事例くらいの状況を報告していたが、障がい、高齢、こどもでもあってもいいのではないか。

委：そのとおりだと思うが、高齢者は件数が非常に多く、こどもの事例でも概要をまとめるのにすごく時間をかけているようなので、事務量が非常に多くなる。

リ：コンセプトはいいが、実務的にどうバランスを取っていくか考えないと、持続可能な形にはならない。私の知る他市の事例でも固定の曜日を設けて、資料がなくても事例の話をする場があり、方向性を決めている。

委：関係のない機関が、どれだけ緊急性を感じて一緒に集まってくれるのか。関係機関は必ず連携するという前提でないといけないのではないか。

リ：やはり地域のコンセンサスが大事になる。事例集を作るときに、作成の経緯を記載し、色々な分野の方が予防的な介入をするために責任をもって集まる土台作りが必要だと思う。浦安スタイルの初動集ができるまでに判断に迷う事例があれば、遠慮なく、基幹相談支援センター、がじゅまるに情報を発信してほしい。

協議結果

(仮称)浦安スタイルの相談支援体制のしくみ作りに向けた議論の状況について協議会に報告し、次回も継続審議とする。

3. 事例検証

前回までに様々な機関が関わる複合的な困難ケースを検証した。今回は、複合的でない相談事例として、身体障がいがある青年の家族からの相談について検証を行った。

架空事例

20代前半の青年の母からの相談。息子は市外の入所施設で自立訓練とリハビリを受けている。

その青年は、長時間の立位が困難、外出や移動の際には車いすを使用。室内では這っ

て移動しており、手すりなどの掴む場所が必要。家事全般（炊事、洗濯）について介助が必要。

2か月後から都内で就職することになり、入所施設の職員と準備を進め、浦安で賃貸アパートを借りて契約。福祉サービスを使って生活支援を整えたいが、どうしたらいいかわからないので、インターネットで検索した相談機関に電話したという相談。

■主な意見のまとめ

1事例（身体障がいの方）について、架空事例ではあるが、現実的には多い事例であり、様々な角度から検証を行うことができた。

その他、事例集案の構成について、対人援助にかかわる方の基本的な考え方・大切に思うこと、困難ケースをつくり出す支援初期の抱え込みをどうやって防ぐか、ネットワークを展開した支援初期の動き方事例、巻末に相談支援事業所一覧、作成者の名簿を掲載することを確認した。

引き続き、支援初期の抱え込みが困難ケースをつくり出すという前提のもと、予防的な介入をするための連携チャート、初動の類型化を整理していく。

また、曜日、時間を固定した情報共有・事例検討の場の会議について、全員が重要性を理解し、継続的に参加していけるしくみづくりが課題としてあげられた。

事例集作成後の運用については、自立支援協議会とも連動し、2か年で作成していくこととする。